福島潟のオニバス

尾崎富衛

1. はじめに

最近数年間に西南日本の各地でオニバス Euryale ferox Salisb. の自生地についての記事を多くみかけるが、本県における新しい報告は見当らない。福島潟はその北限の産地として全国的に有名であると共に、古くから地元でも知られ、食用として利用されてきた。

本種が初めて文献に現れるのは新潟県天産誌（1925）で、その後真保一輔による天然記念物調査報告（1934）にも現れている。筆者等が地元の依頼により福島潟の植生を調査（1975）した際にも当初は多数の自生が認められたが、干拓事業の進展に伴い全くその姿を消し、絶滅したかに見えた。

昨年の夏、たまたま現地を測量していた土木業者により、正面堤防わきに大規模の群落が発見され、地元豊栄市において現場を確認し、新聞（新潟日報8・18 ほか）でも報道され、話題を呼んだ。地元では郷土のシンボルのようなこの植物の再来を喜び、今後積極的に保護対策を講じて行きたいと考えている。次に筆者が現地を調査し、見聞した事を記す。

2. 調査の内容

調査月日　1988・8・25 および 9・3
場　所　豊栄市新鼻・福島潟正面堤防中程
面　積　50x35メートル　の不整三角形　約1100 平方メートル
水　深　0.5 ～0.8メートル　で泥深は不明

現地はヨシ草原の中に出来た極めて小さい人工の池で、南側の正面堤防と北側の福島潟の水路との間に挟まれている（図1、2）。この池は潟の水面との間に特別の流入、流出路はないが、ヨシの根元を通って自然に潟の水との交流があるようである。水質の詳細は不明であるが、潟と殆ど変わらないものと思う。また人工とは言え泥深はかなり深く、オニバスの生育には極めて都合のよい状態となっている。オニバスはこの池の前面に生育しており、殆ど水面が隠れる程密生する。花は通常8月下旬～9月中旬に開花するが、ここでも8月25日の調査時に多数開いており、特に9月3日には時刻が丁度正午頃であったこともあり、最も旺盛な開花ぶりを示していた（図3、4）。

ここに生育する株の葉は筆者が今まで見たことのない大きなものを含んでいるので、特に巨大と思われる数葉を選んで葉身の長径を測定した。

a190, b180, c150, d190, e （推定）220
平均186　（単位センチメートル）

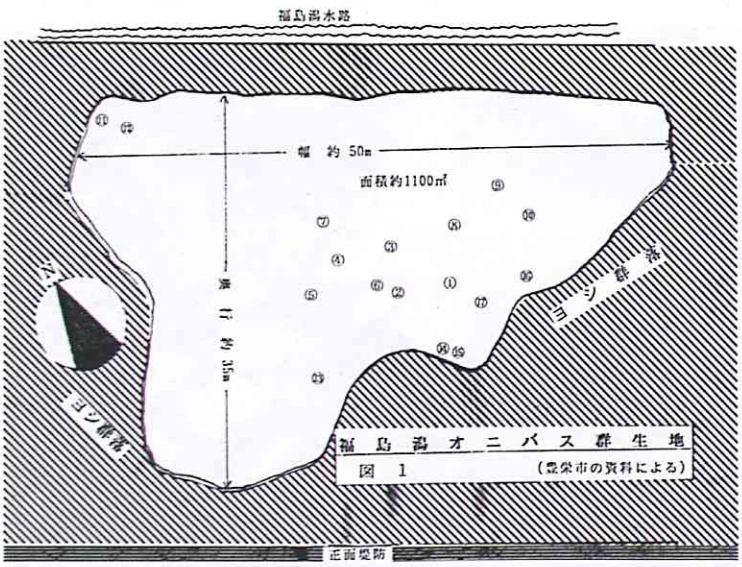

図2　自生池の全景 63. 9. 3

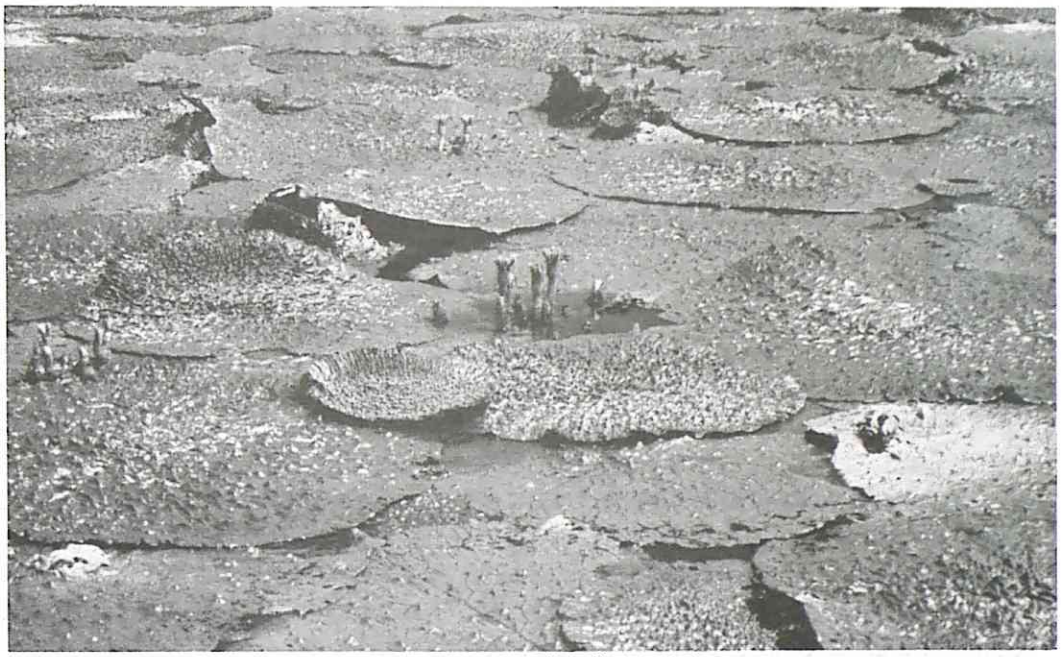

図3　密生する葉と花 63. 9.3

この値は筆者が1980年新潟市の佐潟で測定した最大値の145センチメートル、1984年鳥屋野潟で測定した160センチメートルに比べて非常に大きなものので、県内の記録では最大であろう（全国では過去に280センチメートルの記録がある）。地元の管理者の一部ではこの成長ぶりを見て、あまりに巨大でしかも葉縁の競り合いが激しいので、適当に葉を間引いてはどうかと言った意見も出たそうであるが、そのような人為的な調節が不適当なことは言うまでもない。

3.　再発見の経緯と生育条件

この小池は潟の農地整備事業に関連して、3年程前からこの場所の土砂を採取し、その跡へ他の干拓地から運んだ土砂で埋め戻した結果生じたとのことである。

このようにして20年近く経って再発見された（その間にも用水路などで 2,3の個体が見出されたことはあったが、広く紹介されなかった）ばかりでなく、極めて旺盛な生育をしたことは次のような好条件が重なったものとおもわれる。

ア、往時の潟の水生植物が旺盛に繁茂していた頃に形成された泥土が運搬されたこと。

イ、その泥土中に多数の昔のオニバスの種子を含んでいたと考えられること。

ウ、埋め戻されて出来た池の水深や周囲の環境がオニバスの生育に適していたこと。

農林省の干拓事業開始後20年近く経過し、潟の自然環境は激変し、オニバスの生育に適した所は北側の一部を除いて殆ど無くなったが、今回偶然人工的に良好な生育環境が形成され、結果、異常とも言える生育を示したものと思われる。

4.　今後の予想

佐潟および鳥屋野潟の例から考えて逐年の生育状況を見ると、流入する泥土と腐食の堆積で水深は次第に浅くなり、生育状態は一年毎に悪くなるのが普通である。しかも他の県の例でもそうであるが、一年草のオニバスの種子は発芽が不定なことが多く、翌年も継続的に群落が形成されるとは限らない。それ故この生育地も翌年また旺盛な生育をする保証はないが、現在の生育環境を変更しなければ今後数年間は同様な群落の形成が期待出来るものと思われる。

図4　開花 63. 9.3

5.　終わりに

オニバスは、世界有数の巨大な葉身を持つこと、化石的な植物の一つであること、英名をGorgon Plantと呼ばれるように形態が極めて奇異なことなどで、水生植物の中でも昔から注目されて来た。また近時全国各地の湖沼などの生育地が開発のため消えつつある時、北限の地としての福島潟のオニバスの価値は一層増すであろう。幸い地元では今後官民呼応してこの植物と自生地を積極的に守り、観光資源としても役立てたいと念願している。福島潟の貴重な文化財として子孫の為にもこの植物が継続的に生育し発展してゆくことを願ってやまない。

付記　－　本調査地と別に同年笹川通博により福島潟北端において他の自生地が見出されている。

（新潟市西小針台 2－8－30）